

## 第2回栄村むらづくり懇話会

—産業振興部会—

(以下 Q : Question A : Answer O : Opinion)

※前半 1 時間は地域ブランドに関する勉強会を実施。前回のむらづくり懇話会の中で、地域ブランド化、ブランディングというものが出てきたので、本計画の素案にそれらを盛り込めればと考え、専門家を招き勉強会を開催したもの。

### 【意見集約】

O : 勉強会では農業について話は出たものの、その他の林業や観光といった話がなかったの  
で、それに関する話を聞かせていただきたい。

A : 前回の懇話会の中では、林業・観光（スキー場）に関する話をしていなかったの  
のあたりのご意見があればいただきたい。因みに、先ほどの勉強会資料の中でも触れてい  
るが、今観光のキーワードは「地域らしさを街歩きしながら、五感で味わうこと」である。  
以前、「秋山の観光について」という懇談会を開催したのだが、秋山は利用者が大幅に減  
っている状況にある。「五感」で考えた場合、例えば上の原という地域においては、国道  
下の田んぼが通行者に楽しんでもらえる景観であったが、今は荒れ放題になってしまっ  
ている。つまり、「暮らし」が見えなくなっている。それが、秋山郷しかななくな  
ってしまったということなのかと思えた。そこに住んでいる人が米を作り、その姿を見せ、  
自信を持って薦めていくことでその米が売れていくのではないかと。そういったように、観  
光と農業がタイアップしていかなければならないのではないかと考えている。

O : 産業ごとに分け、この中で具体策を考えていくことも大事だが、これらを最終的にどの  
ように結びつけて栄村の産業としていくかということを考えていかなければならないと  
思う。観光は観光だけ、農業は農業だけでやっていこうとしているように見える。そう  
ではなく、これだけ人口が減ってきているなかで「それらをどのように結び付けていくか」  
ということを考えられる母体を作った方が、お互い相乗効果が期待できるように思う。

A : その中で、先ほど申したような「ブランド化」をしてもらい、どうやって結び付けてい  
くかというノウハウを取り入れられればと考えたのが今日の勉強会の目的。先日、物産館  
に行ったのだが、物産館の人は栄村のトマトジュースを物産館でしか買えないと言っ  
ている。トマトジュースはある程度有名になってきたが、全国的に広めていくよう図って  
きたなかで、物産館でしか買えないとってしまうのは勿体無い。そういった意味では、今  
のお話のように、一つ何かに向かってプロジェクトチームなり、この委員会のような組織  
なりがあればと思っている。

O : アスパラを作るとした時に、たくさんの人を雇わなければいけないという話もあるが、  
実際には見ているだけでも作れてしまう。それは炭素循環農法とあって、害虫は減らせら  
れるし味も良いという評価もあり、需要もあると思っている。栄村は木も草もたくさんあ  
るため、それらを生かした農産物として作っていければ、それも栄村の良さとして出して

いけると思う。炭素の循環には時間がかかるため、これは年数のかかる話であるが、こういったものの方が良いのではないか。

O: この夏、山荘のレストランに食事を出したのだが、その場で採れた野菜を観光客に食べてもらうというもので、新鮮さとロケーションを楽しめるものだった。こういった、その場で楽しめたり交流を深めたりといった仕掛け作りも面白いのではないかと思った。

O: 「無農薬」や「安全」といったものに価値を見出してもらえるのであれば、多少形が悪いなど品質が落ちても売れると思う。そういった方法で売ることも考えてみてはどうか。

O: 農業生産から観光など、色々なものを結びつける仕組みというのは実際になかなか無い。それを今回の構想の中には見出してもらいたい。これは、誰がやらなければならないというものではなく、みんなが協力をしなければならないこと。そうすると、若い人たちをどんどん入れることによって新しいアイデアも生まれるし、それがなければ地域が残っていかないということにもなりかねない。

ジオパークの職員が、自分たちがこの地域を知らなかったという話をしていた。こんなに良い所があるというのを、ガイドになるまで知らなかったというのだ。秋山観光にしてもそうだが、話を付けるだけで魅力が変わってくる。そこに山菜や農産物などさまざまなものを結び付けていけば、必ず面白いものができると思う。そのためには、バラバラでいては駄目。やる気のある若い人を見つけ出して、相乗効果を出していかなければならず、そのためには、夢が見えるような経営計画の提案をするなどしていかなければならない。そういった視点から考えても、この計画は重要なもの。この計画がうまくいかなければ栄村の将来は無いというくらいのものだと思っている。

O: 林業は産業として成り立たなかったというのがある。機械や肥料など費用が高騰するなかで、価格の安い輸入品に消費者が向いてしまったというのもあるが、栄村の悪いところとして「長続きしない」ということが原因としてあったと思っている。

Q: 林業に関連するかはわからないが、きのこを例にとれば、とれなくなったとしても栽培するなど昔は対応をしていたのではないか。

A: 観光農園的なきのこ栽培については、それほど規模ではやってない。しかし、もしそれを行い、一度観光客を栽培地に連れて行ったら、山を覚えて次は黙って行ってしまうということがある。個人でやる分にはいいかもしれないが、これを集団でやるとした場合にはやはり話し合う場などが欲しい。

Q: 畜産業の話もあったが、有名なシェフを呼ぶなどして、ここで料理を作るなどしてみればいいのではないか。「食べさせる」というのは重要。建物を造って一人雇えばその分人口も増えることになるわけだから、そんな発想も大事だと思っている。

A: 面白いし、重要だと思う。しかしそれも振興公社に依頼するなどして過去にやってきた。それも、先ほど述べたように、長続きしなかった。だから、これからはどこかに丸投げするのではなく、みんなで連携していくことが必要ではないかと考えている。

O: あれもこれもやりすぎではないか。ブランドというのは「あそこへ行ったらこれだ」と

いうものを印象付けるもので、「野菜がうまい」「地域も良い」というが、それはみんなそう言うのではないか。全国どこへ行っても自分たちが作った米が旨いと言うはず。本当に何か差別化を考えなければ。

Q:「これで売っていく」というイメージが大事ではないか。栄村というのは全国の誰もが知らないところなのだから、そんなところへ強いイメージを印象付けられれば良いのではないか。個人的には、人との触れ合いのなかで非常に良い印象が与えられるのではないかと考えている。観光地は、一度行ってしまえば満足してしまうのに対し、「あの婆ちゃんにもう一度会いたい」「あの兄ちゃんにもう一度会いたい」と思ってもらえるような場所になれば、何度も訪れてもらえる地になるのではないか。

Q: 昨年、村の伝統工芸品が県の指定品目に選出されたと思うが、村としてはそれをどのように活用していく考えなのか。生産数を増やして売るなど戦略みたいなものはないのか。

A: 戦略というよりも、それをいかに産業に結びつけるかということを考えている。原料である藁をどうやって確保するか、誰が作るのかなど。まずは、生産者の後継者作りということで、公民館などで技術伝承の講座を開いている。

Q: そういった藁の確保などについては、村としてどのようにしようと考えているのか。

A: 基本は、誰が集めるとかではなく、自分が作った藁で作ると考えている。

Q: 誰かがその中に入って藁を提供するなどしなければ発展しないように思うが。

A: 現在は葛箆振興会というものができて、そこが藁の斡旋もするというようになっており、最近では会員も増えている。

Q: そういったことが分かると良い。やはり、そういったことを見える化をどのようにするかということだと思う。他の工芸品についてはどうなのか。

A: それ以外は組織で何かをやっているというものは無い。木鉢も登録はされているが、もう材料となるトチの木が無い。なので、行政として応援できるものはやってきたが、できないこともある。

Q: そういった良いものがあって生かされないとなると、林業は厳しいようにも思う。

A: 林業は、それでも間伐材の活用などで取り組んできたので、ある程度の収入は確保できている。逆にいうと、ほとんどが間伐材となっている。

Q: 林業でいうと、昔に比べてニーズが変わってきており、杉の銘木というのは少しあれば良くなってしまった。最近、バイオ発電の関係でカラマツの需要が高まっており、それに応えられる事業者が少なくなっている。そういった世の中の動きに見合った林業ということも対応していかなければならないと思う。ただ、栄村も山がたくさんあるので、そういった点では活用の余地があると思う。

Q: それで雇用は増えているのか。

A: 増えている。最近では「林業女子」と呼ばれるように、女性からも注目の集まる仕事になりつつある。

Q: この素案は全て抽象的に書かれていて、具体的ではないように思うが。

A：これから徐々に構想にしていく。

Q：構想ということは、具体的な数字とかはいえないということか。

A：具体的な数字等については、5年計画などに盛り込んでいく。そのため、この計画に基づいて今後のアクションプランなどを練っていくことになる。

Q：スキー場に関しては、どのようにしていくのか。

A：誰がどのように将来考えていくかということがあると思うが、村の皆さんに意見をいただきながら真剣に将来計画を考えなければいけないと思っている。ただ、長野県にはスキー場が100カ所以上あり、全体的な数字も増えない中で近隣人口も減っており、このままではいけないとは思っているものの、無くせばいいものとも思っていない。こういった形で続けていくのが良いかということを真剣に考え始めなければいけないと思っている。今話しの出た、ブランド化や村人との交流といったものを残しつつやっていくのが良いのではないかと自分では思っている。

スキー場が儲かっている時代ではないなかで、村の限られた財源がいつまで使えるかというのもある。

Q：「儲ける」というのは難しいと思うが、どれくらいを目指しているなどは無いのか。

A：一つの考え方として、宿泊人数や村での消費額、従業員給与などを測り、その中で赤字であったとしても許容範囲のものであるか判別できればいいのではないかと思っている。

以上